

保育者養成校における子育て支援の実践と課題

齊藤美代子・遠藤純子・橘田美千代・園川 緑・韓 仁愛

帝京平成大学 現代ライフ学部 児童学科 保育・幼稚園コース

Training School's Child-Rearing Support Program: Its Implementation and Potential Problems

SAITO Miyoko, ENDO Junko, KITTA Michiyo, SONOKAWA Midori and HAN Inae

Department of Juvenile Education, Faculty of Modern Life, Teikyo Heisei University

Abstract

On the basis of the past achievements of our child-rearing support program, this study aims to identify educational issues in the childcare worker/teacher training school. In this paper, we have compiled a report on "Puri-Puri Kids Univ", a child-rearing support program which simultaneously provides our students with training opportunities and on-the-job training (OJT). Also, we investigated current child-raising views, child-support programs conducted by other universities and analyzed relevant literature. For the further development of our curriculum, we discussed how we can systematically place a training framework for students within the curriculum which allows them to develop knowledge and skills accumulated through practice in the child-support program during the four-year university education. As a result, the students are thus able to step up efforts to promote better understanding of their discipline, Early Childhood Education and Care.

キーワード：子育て支援 保育者養成教育 実学

はじめに

本学では、子育て支援活動の取り組みの一つとして、「地域の乳幼児へ遊び場を提供する」こと「学生が乳幼児と触れ合い、授業で学んだことを実践する場を設ける」ことを趣旨にし、2008年千葉キャンパスにおいて子育て広場「プリプリキッズ・ユニバ」を開設した。この実績を引継ぎ、さらに発展させるために、2013年中野キャンパス開講の際、新たにスタートしたところである。今年度、開設2年目を迎え、中野区の行

政当局も含め、医師会、社会福祉協議会等からの見学者が相次ぐなど、施設・設備、保育の内容等、大きな期待が寄せられているところである。

2015年4月には、「子ども・子育て支援新制度」がスタートし、日本の保育行政は、新たな段階に踏み込むことが見込まれている。こうした中で、保育者養成機関として指定されている本学保育・幼稚園コースにおいて、どのような資質・能力をもった保育者を社会に送り出していくことが求められているか、改めて検討することが求められている。

本稿では、子育て支援活動としての「プリプリキッズ・ユニバ」の実践の成果と課題を捉え、今後の保育者養成の方向について考察するものである。

1. 子育て支援における課題と保育者に求められる専門性

1) 子育て支援の充実に求められるもの

現代の日本社会における子育てをめぐる状況は、少子化、家族形態の変化、親準備性が育つことの困難さ、子育て家庭の社会からの孤立化などといった様々な問題を抱えている。また、子育てを伝承する世代が身近にいない、子育てのモデルとなる存在がいない、あるいは困った時に相談できる存在がいないといったことに加え、父親の育児参加が望めないような育児制度の中、自信のなさばかりが増長されるような環境下で子育てを営まなければならない、といった厳しい状況がある。内閣府の子ども・子育て支援の意義のポイント（基本指針）において示されているように（内閣府、2014）、「子どもの最善の利益」が実現され、子どもの健やかな育ちが支えられていくためには、養育者をはじめとする特定の大人との愛着形成を基礎とした情緒の安定や他者への信頼感といったものが基盤となる。大豆生田（2008）は、子育て支援とは「子育てという営みあるいは養育機能に対して、私的・社会的・公的機能が支援的にかわることにより、安心して子どもを生み育てる環境を作るとともに、子どもの健やかな育ちを促すことを目的とする営みである」と述べているが、子どもの育ちが支えられていくためには、情緒の安定や他者への安定感といった育ちの基盤が健全に形成されるべく、子どもとその家族を含め、子どもが育つ「子育て家庭」がその養育機能を発揮できるよう支援していくといった観点が不可欠である。

2015年4月に子ども・子育て支援新制度が本格稼働する。子ども・子育て支援新制度は、すべての子どもの良質な成育環境を保障し、子ども・子育て家庭を社会全体で支援することを目的とし、従来の保育所も含めた児童福祉施設を利用する子どもたちへの支援だけでなく、親の就労の有無にかかわらず、全ての子どもと子育てをしている親、そして子育てに関わる家庭全体とを支援することの充実に求められている。従来の子育て施策では、少子化対策が念頭に置かれ、就労している母親への子育て負担を軽減させる支援が主であったが、今回の子ども・子育て支援新制度において

は、子どもや子育て家庭を取り巻く環境の変化による育児不安の増大を背景に、全ての子育て家庭への社会的な支援が求められるようになった。就労している母親にとっては、仕事と子育ての両立は、疲弊しやすい傾向がある一方、仕事を通じて自己実現の機会があるとともに、保育所などの子育て支援や、送迎時の祖父母の援助をはじめとする周囲からの諸支援を受ける機会が得られやすい。しかし、専業主婦の抱く負担感は、困った時に相談や手助けを求める存在がいない、家庭や地域の中に子育てのモデルがいない、といった自信のなさばかりが増長されていくような環境下で子育てを営まなければならないといった困難から生じるものであり、就労をしている母親に対する仕事と子育ての両立への支援とはまた別の視点からの支援、つまり育児不安の緩和や子育て環境の整備等といった子育てにおける根本的な部分への支援といったものが必要である。

これまで国内でなされてきた育児不安の研究においても、専業主婦の母親に育児不安が高いことが指摘されており（村山ら、2005）、専業主婦が「自分のやりたいことができない」といった自己効力感をもちにくく、生き方への否定的感情が高いという結果も報告されている（永久、1995）。全ての子育て家庭への支援を考えていく上では、物理的な負担軽減にとどまらず、母親の生き方そのものを尊重していけるような支援を視野に入れる必要があると考えられる。育児不安の軽減の一助となる「要因」としては、「母親の社会的な活動」・「母親のもつネットワーク」・「夫との関係」・「他の子どもとの比較」等が挙げられ（岩田、1997）、育児ソーシャルサポートとしての育児仲間が存在が育児不安の緩和要因として作用していることが明らかとなっている（渡辺・石井、2005）。また、周囲の人からサポートを受け、育児への肯定的感情がしっかり支えられることにより、育児不安の増幅が抑制されると指摘されている（荒牧、2003）。子育て支援のあり方を考えていくにあたっては、子育ての負担感といったネガティブな面を解消していくことだけでなく、「子育てが楽しい」「子どもの育ちが愛おしく喜ばしい」「子どもを育てることによって自分も成長していると感じる」といった育児への肯定的感情を感じられることにより、親自身がポジティブに子育ての主体となれるよう、社会的な支援を行っていくことが必要であろう。

今後の支援の一つのあり方として、子育てを豊かさ・楽しさや感動を実感できる営みとして感じられるよう

な支援が求められるであろう。そのためには、母親や養育者が子育てを肯定的に感じられるような場や、子育ての仲間作りや社会的な活動を提供することで、支援者や子育ての仲間と共に子どもの育ちを見守っていくことができるような関係性を形成し、子どもと共に親や養育者が共に育っていくことを支えていくことが望まれるのではないだろうか。そして、そのような支援を担っていくためには、子育ての場の形成に携わる資質や視点とともに、子育ての不安を共感し、楽しさを伝えていけるような精神的な支えとなれるような資質をもつ人材を育てていくことが、喫緊の課題であると言えよう。

2) 保育者養成における現行のカリキュラムでの課題

子育て支援の担い手として、子育て支援員制度の導入を国は 2015 年度からスタートさせていく。地域で子育てを支える人を増やすという点では、大変意義深い制度であるが、子育て支援を主導していく役割を担うものとして、子どもの発達や保護者支援の専門的な知識をもったものとして果たす保育士・幼稚園教諭の存在は欠かせないものであるだろう。

2008 年の『保育所保育指針』改定において、改定の 4 つの要点のうちの一つに「子育て支援」が掲げられ、「保護者支援」「地域における子育て支援」の二つの役割を担うことが明記された。同様に、2008 年の『幼稚園教育要領』改定においても、同様に「子育ての支援」が明記されている。このように、子育てへの社会全体で支援ニーズの高まりとともに、保育士・幼稚園教諭といった保育者は、子どもの保育だけではなく、保護者そして地域の子育てを担うべく専門性を身につけることが資質の一つとして求められるようになった。実際に、「利用者支援機能」・「地域支援機能」の両面が求められる地域機能強化型の地域子育て支援拠点事業では、従事者として「育児・保育等について相当の知識・経験を有し、地域の子育て事情や社会資源に精通する者」を置くこととされており、保育士・幼稚園教諭はこの条件に当てはまる専門職であると言える。柏女ら（2000）の全国調査では、保育所併設型の支援センターでは、約 9 割を保育士が占めるという報告がなされており、支援の最前線での活躍を担っていることが伺える。

質の高い子育て支援を担うことができる専門職としての知識や技術をもった学生を育て、送り出していく

ことは、保育者養成機関に対して社会的に求められている重要な課題であるといっても過言ではないだろう。

家庭支援・地域支援に必要とされる専門的知識は、保育士として勤務する中で、獲得のプロセスがあることが示されている。日常的なレベルでの保護者との関わり（勤務 1、2 年で獲得）、個別の相談への対応（勤務 3、4 年で獲得）、家庭支援の中心的役割をどう担っていくか（勤務 5 年で獲得）といったプロセスがあり、それぞれの段階で求められる専門性は全く異なることが予想される（全国保育士養成協議会、2013）。家庭支援・地域支援に必要とされる専門的知識の獲得については、養成校での学び、そして保育現場での学びといった長期的な成長プロセスの見通しを持ちながら、ベースとなる部分を養成校で習得していくことが必要であると言えよう。

また同調査では、現場の保育者と養成校教員との意識差も浮き彫りになっている。「子ども同士や子どもと保護者のかかわりを見守り、関係づくりを援助することができる」という質問項目において、保育所保育士は「勤務年数 3、4 年までに」と回答している比率が低く、「勤務年数 10 年以上」での比率が高かった。一方で、養成校教員は「勤務年数 3、4 年までに」の回答の比率が高く、「勤務年数 5 年以上」「勤務年数 10 年以上」の比率が低かった（全国保育士養成協議会、2013）。養成校教員が認識するよりも、保育所保育士は、子どもと保護者の関係づくりの援助といった技術は、より長い経験が求められるものである、という認識を持っていると言えよう。基礎的な知識の習得に加え、学生の頃から保育現場において体験的に親子と触れ合う機会をもつことが、就職してからの「保護者支援・子育て支援」に有効に作用するといった指摘もなされている（豊田、2010）。「保護者支援・子育て支援」には、ある程度の経験が必要であり、在学中から家庭支援・地域支援に必要な経験を重ねていくことが即戦力となる保育者の養成につながっていくと考えられる。

しかしながら、現在のカリキュラムだけでは、子育て支援に必要な経験を十分に重ねることは難しいという現状がある。保育士養成課程におけるカリキュラムを例にとると、こうした経験ができる科目は実習科目であり、保育実習ⅠA（必修）・保育実習ⅠB（必修）・保育実習Ⅱないしは保育実習Ⅲ（選択実習）が位置づけられており、保育所や児童福祉施設で 90 時間の実

習を計3回経験することになっている。その中で保護者・家庭への支援と地域社会等との連携を学ぶことが内容として示されているが(厚生労働省, 2003)、個人情報保護の観点からも、実習という場で保護者・家庭への支援について深く学ぶことは難しいといった現状がある。また、これらの実習では、保育者と利用児との関わりを学ぶことが中心であり、親子のかかわりや親子への継続的な支援のあり方を直接的に学ぶことは、90時間(おおよそ2週間)の実習期間だけでは限界があり、親子の関わりの方場についての経験を殆どもたずに保育現場に巣立っていくケースが大半である。「保護者支援」「地域における子育て支援」への社会的需要が高まっている昨今において、保育の場にとどまらず、地域で力を発揮していく保育者を養成していくためには、現行のカリキュラムに加えた実践の場が必要であると言える。

3) 大学における学びの場の提供

多様化していく子育てニーズに応じていくためには、子どもや養育者の心を汲み取り、受け止め、働きかけていくこと、すなわち「受信型保育技術」(柏女, 2010)が必要である。しかし、「受信型保育技術」の獲得は、保育現場で様々な子どもや保護者の気持ちの存在に触れ、その背景にあるものを分析していくことが必要であるが、机上の学問だけでは習得できることに限界がある。養育者からの訴えや困りごとは、訴えとして語られたことそのものよりも、その裏に隠れている問題が原因となっていることも多い。例えば離乳食を食べてくれない「自分ひとりで離乳食を食べさせることが怖い」という訴えにおいては、離乳食の作り方や食べさせ方といったことに困り感を抱いているのではなく、育児を自分ひとりでしなければならぬことの不安、自分が食事面で安心感を得ることができなかった経験が、親子関係の構築への漠然とした不安へとつながっている、などと様々な要因が絡んでいると思われるケースがある。訴えの背景には、育児不安、自分が育ってきた養育環境、社会の中での孤立感など様々な要因が絡み合っていることも多く、このケースの場合、「離乳食を食べられるように」する支援だけでは根本的な解決にはつながらない。支援というのは、一方的に与えるものではなく、何が必要とされているのかを見極めなければ、適切な支援をすることができない。情報を受信して、その背景までも推察してそこから問題点を探り出すことが必要なのである。問

題を解決するための材料として、大学で学んだ理論や知識が生きてくるのだが、それをどのように活用したらよいのか、実践に移していく力が必要である。自分が直面する問題に、どの視点からどのような手段で向かっていけばよいのか、そうした点を考えていく力を身につけるためには、現場で様々な事例に出会い、そこにある様々な子どもや養育者の気持ちの存在や、そこに複雑に絡み合う背景といったものに直面することが不可欠なのである。

育児不安を抱える養育者の支援にあたっては、不安を受け止める者と、その不安を受容できる関係性や場があることが大切である。そうした気持ちを受け止められた上で、母親が子育てへの肯定的な気持ちを持ち、そして主体的に子育てを捉えていくという気持ちへと向かっていけるのである。そして、そうしたプロセスを丁寧に見守ることのできる存在と場が、子育ての大きな支えとなるであろう。母親が子育ての主体となっていけるためには、親が自信をもって親役割を果たしていけるような支援の質を高めていくこと(榎原・今井, 2006)が必要であり、親としての育ちを支えていく観点が不可欠である。そのためには、これからの子育て支援を担っていく学生自身が、子育てをする親の様々な気持ちに触れる場と、それを支えることによる子育て感情の変容を経験することや、共に子育ての楽しさや感動を実感し、共に支えていくことの素晴らしさを感じていけるような経験を重ねていくことが、共に育ちあえる支援を提供できる保育者養成の一助となるであろう。

次章から述べていく大学内での子育て支援の場が、こうした主体的な子育てを支えていく場の提供と、子育て支援を担っていく学生の養成といった、この両面が共に実現可能な場となることが期待される。

2. 保育者養成校における子育て支援の現況

1) 地域子育て支援拠点事業の一環となる保育者養成校の現在

前章でも触れたように2008年「保育所保育指針」の改定により、保育士には従来の子ども支援に加え、「保護者支援」と「地域における子育て支援」が追加された。なお、次年度から施行される「子ども・子育て支援新システム」では、地域子育て拠点事業として、親子の交流促進と育児相談を実施するなど、子育ての孤立感、負担感の解決を図るため、全ての子育て

家庭を地域で支える取り組みを拡充することになっている。その中には保育者養成校における子育て支援事業も含まれている。

ここでは、ここ 5 年以内における地域子育て支援事業の取り組みの現状の中から保育者養成校で行ってきた子育て支援事業を取り上げ、その詳細内容を検討・分析する。

まず、厚生労働省の統計によると、2012 年度では全 5,968 所の内、ひろば型が 2,266 ケ所、センター型 3,302 ケ所、そして、児童館型が 400 ケ所を占めていた。来年度にはひろば型とセンター型が一般型に再編され、利用者支援と地域支援を加え、「地域機能強化型」が創設されることになる。また、児童館型は連携型に再編され、多様なニーズに応じることが求められている。従来保育者養成校における子育て支援にはひろば型とセンター型があり、その中でもひろば型による実施型で地域に子育て支援を行う養成校が多い。このような養成校及び学校法人による地域子育て支援事業は全地域子育て支援拠点事業の中でどの程度占めているのかを統計数値で概観してみたい。

まず、2009 年から 2012 年の 4 年間で地域子育て支援拠点事業（ひろば型）が 1.5 倍増していることより、子育て支援事業の必要性が実際の支援事業の増加

につながっていることとみられる。その中心となっているのが市町村直営から社会福祉法人に移行されている。そして、徐々にではあるが、地域子育て支援事業を実施している養成校が 2011 年度から 2012 年度に 3 ケ所増えている。2012 年度において全ひろば型 2,266 ケ所に対して、保育者養成校は 1.1% にすぎない。只、この数値は厚生労働省による子育て支援交付金の交付を受けている施設に限るものであり、各自治体や学校法人独自で営んでいたり、ひろば型の実施日数や実施時間に満たない行政の地域子育て支援拠点事業の枠内にはまらない場合もあることを考慮すると、表 1 が全ひろば型の地域子育て支援拠点事業だと断言することはできない。

その他、保育者養成校を含む学校法人が子育てセンターとして NPO や自治体と共に地域拠点事業を営む場合もあるが実際占める割合や数までは明らかではない。なお、学校によってはひろば型のみ、または子育てセンター内にひろば型事業が行われる場合等、地域拠点子育て事業の形態は様々である。その中から 3 つを取り上げる。小田原女子短期大学（吉田、2008）では、小田原市との共催事業として子育て支援ひろばが行われている。札幌大谷短期大学（片山、2009）においては、ひろば型子育て支援事業以外に

表 1 地域子育て支援拠点事業（ひろば型）実施状況

運営主体別	2009 年度		2010 年度		2011 年度		2012 年度	
	ヶ所	%	ヶ所	%	ヶ所	%	ヶ所	%
市町村直営	505	34	592	30.8	608	29.2	・	・
NPO 法人	244	16	348	18.1	367	17.6	・	・
社会福祉法人	388	26	605	31.5	695	33.4	・	・
社会福祉協議会	120	8	104	5.4	108	5.2	・	・
学校法人	26	3	39	2.0	49 (22)	2.4	61 (25)	・
株式会社	14	2	30	1.6	28	1.3	・	・
その他（生活協同組合など）	144	10	163	8.5	209	10.0	・	・
未定	・	・	41	2.1	17	0.8	・	・
計	1,481	100	1,922	100	2,081	100	2,266	100

出所：http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/index.html「子ども・子育て支援」（2014 年 10 月 13 日）を元に著者作成。

備考：2009 - 2010 年度は次世代育成支援対策交付金交付決定ベース、2011 年度からは子育て支援交付金交付決定ベースによる統計である。2012 年度の運営主体別の割合は不明。太字は 2014 年 10 月 27 日現在、厚生労働省少子化対策企画室の職員による聞き取り調査の内容である。（ ）は学校法人のうち、短期大学・4 年制大学の地域子育て支援拠点事業の数。

も地域全体におけるネットワークを活かした専門的な子育て相談・子育てボランティア等、地域との連携による子育て支援事業が行われている。白梅学園大学（傳馬ら、2013）では、3歳未満児の親子支援をはじめ、発達臨床型の広場、気になる子の広場、子どもだけではなくシニアまでを含む世代間交流広場が設けられ、地域に根付いた活動を行っている。その中から次節では、保育者養成校の子育て支援事業を3つ紹介し、第4章で本学の子育て支援事業の内容につなげていきたい。

2) 保育者養成校における子育て支援の実践

2008年の「保育所保育指針」改定により保育者養成校は、保育園内で行う子ども・保護者支援だけではなく、園を取り巻く地域の子育て支援が義務付けられた。また、その担い手となる学生が如何に子育て支援を実践する力を備えた保育者として育てられるかが求められることを意味する。すなわち、保育者養成校には、子育て中の家庭の親子にとって地域の子育て支援の拠点でありながら、子育て支援の担い手となる学生の養成を共に実行する場であることが求められている。前項では学校法人におけるひろば型子育て事業が増えつつあり、養成校における子育て支援事業を実施する形態は様々であることに触れた。

ここでは、養成校における子育て支援事業を取り上げ、事業内容と学生養成の実際について検討する。

(1) 子育てひろば型子育て支援の一例

東京家政大学は、生活に関わる衣食住をはじめとする芸術・英語教育までの包括的な生活に関する教育研究機関として「ヒューマンライフ支援センター（ヒューリップ）」を設立した。その活動の一環である子育て支援サロン「ヒューリップすくすくサロン」は、3歳までの乳幼児と保護者を対象として、2003年より「であい」「ふれあい」「学びあい」「育てあい」の場をモットーにスタートした。2012年4月からは、板橋区の地域子育て支援拠点事業の委託を受け、新たに「森のサロン」と名称を変え、子育て支援事業を続けている。設立当初は火・水・木曜日の午前10時から12時まで、曜日毎の実施年齢が異なったが、「森のサロン」に改称後には、平日午前10時から午後4時までの常設運営となり、いつでも利用できるようになっている。主な内容は、子どもそれぞれがおもちゃや絵本で自由に遊び、学生と教員と交流できる場にしている。時に

は学生が企画した各学部学科の専門性を活かしたイベントが実施されることもある。

(2) 地域連携による子育て支援の一例

2008年、岡山県の公立、新見公立短期大学（片山、2009）は、大学内の親子交流ひろばの運営等6事業の拠点となる「にいま子育てカレッジ」を開設した。大学の単独運営ではなく、岡山県備中県民局の提唱に応じた、大学、地域協働による企画・協議・運営で行っている子育て支援事業である。関わる団体には、新見市（社会福祉課、健康づくり課、学校教育課・障害学習課）、新見公立短期大学、新見保健所、社会福祉協議会、幼児クラブ交流事業実行委員会、子どもセンター協議会、保育協議会、つどいの広場、子育て支援センター等がある。

事業内容は下記の通りである。

- ①毎週水・金・土曜日の午前10時から午後4時まで、子育て中の親子を対象に学生と大学教員、地域の子育て支援者が参加して親子交流会を開催
- ②子育て支援者に対する専門研修
- ③子育てカレッジのHPを通した子育て情報の発信
- ④学生に対する子育て経験者・保育者による交流会・講演会
- ⑤地域16団体が参加した「子育て支援座談会」の開催
- ⑥保健所等、他機関との連携による専門的な子育て相談の実施

「にいま子育てカレッジ」は大学内の子育て支援拠点でありながら、地域子育て支援の新見モデルとして、地域における子育て支援の発信地にもなっている。

(3) 総合子育て支援の一例

白梅学園大学は2004年より子ども支援からシニアまでを念頭において子育て支援事業を実施してきた。なお、2014年度より、短期大学・大学の全学科に「地域子育て支援演習」を開講し、学生の「白梅子育て広場」の参加はもちろん、全学科において履修（単位修得）が可能となった。より多くの学生が地域との連携活動に参加して、学びを深めていけるような働きかけが積極的に行われている。白梅子育て広場の特徴は、子どもだけでなく、子どもの保護者、地域の高齢者、障害者まで、幅広い対象者に向けた総合的な支援を行うことである。活動の内容は、①地域に遊び場の提供 ②気になる子の広場 ③小平市内で6つの子育て広場

を展開する「NPO 法人子育てサポートきらら」が白梅学園内で月 1 回開催する「子育て広場きらら in 白梅」④発達臨床型の広場である「紅茶の会ーオレンジ・ペコーー」⑤市内の小中学生の学習支援 & 後援会などの「子どもの広場」事業の開催 ⑥乳幼児・児童、保護者、シニアを対象にした「世代間交流広場」⑦附属白梅幼稚園の園庭解放による遊び場の提供等が実施されている。

以上保育者養成校における子育て支援の取り組みを 3 つの類型に分けて紹介した。本文では、著者が養成校における子育て支援事業を任意に分けたが、事実上この枠に入らず大学独自の子育て支援事業を行っている保育者養成校も少なくない。既に子育て支援事業を行っている保育者養成校では、それぞれ子育て支援活動の設置場所や設置主体、支援内容の種類や内容が異なったりと一律ではない。しかし、子育て支援事業を実施している全ての養成校は、学生を育てる学びの場のみの役割から地域に開けた地域拠点となり子育て支

援の発信を続けていることは間違いない。もしくはそのように位置づこうとする社会全体の要求が養成校に反映されていると言っても良い。その子育て支援事業を広げるにあたり、将来保育の専門職を担っていく、学生教育を念頭にいたった体験学習が子育て支援事業には導入され、子育て支援と学生教育の両輪における子育て支援事業が最も望ましき支援事業のモデルとして進められることになることが望ましい。

3. 本学の子育て支援の実践

1) 本学の子育て支援実践―千葉キャンパスから中野キャンパスへ―

本学の「プリプリキッズ・ユニバ」は、「地域の子育て支援」と「学生教育」を目的とした実学の間として、2008 年 10 月に千葉キャンパスにおいて開設された。本学に保育・幼稚園コースが立ち上がり 3 年目の 2007 年度、保育者養成の実践教育の場の必要性

帝京平成大学
学長 沖永寛子様

平成 20 年 3 月 9 日
人間文化学科保育専攻
主 任 荒木 満紀

事業企画案

保育専攻による特色ある授業づくり

「インターンシップ」に関する実践授業プロジェクト

目的

帝京平成大学の特色づくりとして
保育学研究の場の創設
① 地域との連携によるイメージアップ
地域との連携を強化し本学との共有を有意義なものとしてより円滑なコミュニケーションの醸成と本学イメージの向上に努める。
② 学生のスキルアップ
授業で得た知識技術を実際の現場で活かす経験を積むことにより、より実践的な人材の育成を目指すものとする。

内容

企画 1

「インターンシップ授業」の位置づけの明確化
内容 幼稚園・保育園などへのインターンシップ（園児への出前授業の開催）
40 分ないし 50 分の遊びの時間をコーディネートする体験を積む。2 年生の活動
例) 手遊び・ペーパーサート・紙芝居・からだ遊び・手遊び等

企画 2

「親子支援遊びの広場」の位置づけの明確化
内容 学内に常設コーナーを設け 10 時から 12 時くらいまでを未満児やその親を対象に遊びの実践および親向けに発達相談やカウンセリングなどの実施

企画 3

「親子支援広場の拡大版として 3・4・5 歳児対象の支援遊びの広場」の立ち上げ
3・4・5 歳児を対象とする遊び教室の開催
(3・4 学年有志による活動・帝京平成大内に子どもたちを招いての幼児の遊び教室の開催)
例) 運動遊び・おもちゃ遊び・創作遊び等

企画遂行の具体的な案

1. 「インターンシップ授業」現場の開拓 辰巳保育園 辰巳台幼稚園 市津保育園
アップル幼稚園 柳井幼稚園 ちはら台保育園 白鳥保育園
2. インターンシップなど既存の保育園・幼稚園での支援広場参加者募集
3. 常設の教室やホールなどの確保

以上

資料 1 特色ある授業づくりの「事業企画案」
保育専攻 元主任 荒木満紀（資料提供 石井友光）

平成 20 年 9 月 25 日

帝京平成大学 御中

事業計画書

帝京平成大学
現代ライフ学部
人間文化学科保育専攻
荒木 満紀

「親子支援」の開設することについて

昨年度（平成 19 年度）の集善祭、保育専攻（保育の集い）に参加してくれた近隣の親から「子どもを持った親で交流できる場がないだろうか」「子どものことを相談する場所がないだろうか」といった声が聞かれ、保育という専門性を生かした下記の親子支援の会を実施します。

記

＜目 的＞

1. 保育専攻の学生として「親子遊びの会」に参加することにより親の願い、思い、子どもの発達、成長の過程を学び授業から学んだ理論、技術を習得基礎能力をつける。
2. 地域の親・子どもに、大学の持っている専門性を提供し子育てに関する楽しさ知恵を学んでもらう。
3. 「遊びの会」に参加した親子が、安心して遊び話し合える仲間の輪を広げていく場の役割をする。
4. 大学の専門性を生かした講演を行う。

＜内 容＞

1. 名称「プリプリキッズユニバ」とする。
2. 日時 平成 20 年 10 月 7 日（火曜日）より始め、毎週火曜日に行う。
(大学の休み行事等と重なる時は、このかぎりではない)
3. 時間：午前 10 時～午後 12 時までとする。
4. 場所：9 号館 202 号室の教室で行う。
5. 定員：20 組の親子とする。
6. 参加資格：0 歳から就学前までの乳幼児とする。
(申し込みせいで、参加費は無料、大学の保険に入る)
7. スタッフ：保育専攻の学生と教員で行う。
8. この会は教員、学生の支援により、親子が安心して、ゆったり遊び過ごせる場となるよう遊具、絵本等、環境を整える。(教員、学生が支援していく)
9. 駐車場：車でくる親子には、学生駐車場を利用してもらう。
10. 学生食堂も利用できる

以上

資料 2 親子支援開設の「事業計画書」
保育専攻 元主任 荒木満紀

から、親子広場実施の構想が練られ、2007年度末に、当時の保育・幼稚園コースの特色ある授業づくりとして事業企画案が作成された。

当時はまだ名称が決まっていなかったプリプリキッズ・ユニバの計画は、資料1の企画2で「親子支援遊びの広場」として記載された。翌年度には順調に開設の運びとなり、「地域の子育て支援」と「学生教育」の2本柱の目的のもと、動き出した。当初はセミナーで「プリプリキッズ・ユニバ」を実施し、保育・幼稚園コースの全教員で取り組んだ。当時は会場として一般の教室を使用し、学生と共に教室の机と椅子を運び出し、じゅうたんを敷いて遊び場を提供していた。1年生のセミナーの各クラス約13名が、順番に当日のプリプリキッズ・ユニバの当番を受け持った。教員はできる限り、担任以外も参加した。学生は、担任と共にその日に向けて一生懸命、朝の挨拶の仕方から話し合っていた。しかし、まだ入学して半年の学生たちは子どもと関わるのが難しいだけではなく、保護者の存在に戸惑う学生も少なくなかったため、2009年度からは2年生セミナーの学生が、プリプリキッズ・ユニバの当番を担当した。

おもちゃは開設に伴い購入された物の他、保育・幼稚園コースの授業用としてプレイルームに保管されていた絵本や積木やおままごとセットなども活用した。

千葉キャンパスでの4年半は、基本的に授業期間内の火曜日の午前中10:00～12:00の開設とし、登録の上限を決めることなく、1年を通じて随時受付をした。毎年市原市の広報で募集し、登録は50組程あった。開催時は20組前後の親子が参加していた。10～15人程の保育・幼稚園コースの学生の参加があり、時々是他学科の学生も一緒に子どもと遊んでいる光景も見られた。学内に子どもたちの笑顔があると、学生の表情も和らぐようだった。千葉キャンパス内の豊かな自然を生かし、どんぐり拾いや芝すべりなど、日常的に外遊びも行っていた。造成中の住宅地が近くにあり引っ越してきたばかりの親子もいたが、プリプリキッズ・ユニバが地域の子育て仲間のつながりを作ることに役立っていた。学生数や参加登録者数が今より少ない状態だったこともあり個々のつながりが作りやすく、学生自身が親子の様子を捉え、対応を考えていく姿もあった。そして千葉キャンパスでの地域の参加者には大変惜しまれながら、2013年度の中野キャンパス開設に伴い、「プリプリキッズ・ユニバ」も中野キャンパスに移転した。

2) 中野キャンパスでのプリプリキッズ・ユニバの取り組み

(1) 「プリプリキッズ・ユニバ」コンセプト—実施要項を踏まえて—

中野キャンパスの開設にあたり、実施要項を作成した。下記の内容は「帝京平成大学 中野キャンパス 子育て広場『プリプリキッズ・ユニバ』実施要項」(平成24年4月1日)の一部である。

1. 名称

帝京平成大学中野キャンパスに開設する子育て広場の名称は「プリプリキッズ・ユニバ」とする。

2. 目的

- (1) 本学の中野地区における地域連携、地域貢献活動の一環として、子育て支援活動を展開する。
- (2) 保育・幼稚園コースの学生に、乳幼児と触れ合う機会を与え、〈こども〉への理解・認識を深めさせるとともに、子育て支援・家庭支援の現場を間近に見せ、保育のもつ多様な側面や意義を学ばせる。

3. 内容

(1) 地域における子育て支援活動

- ①地域の乳幼児の成長・発達に資する、安全かつ楽しい遊びの場を提供するとともに、様々な体験の場を設ける。
- ②保護者を対象として、仲間づくりの機会や子育てに関する学びの場を提供するとともに、保護者からの子育て相談に応ずる。
- ③その他、子育て支援活動に必要なことに取り組む。

(2) 保育・幼稚園コースの学生への指導

- ①学生の学習の進捗状況に即して、見学・観察等の機会を設ける。
- ②授業内容を実践的に理解するために、子育て支援活動(こどもと関わる部分)に参加させる。
- ③その他、学生が保育者としての資質を身につけるために必要なことに取り組む。

本学1階「外部利用者用の入り口を設けた子育て支援活動専用スペース」を活用し、地域の子育て支援活動として、親子の遊び場、保護者同士の仲間づくりの場、子育て相談、保護者への情報提供等の活動を行っている。保育者養成機関である保育・幼稚園コース

に在籍する学生が、乳幼児や保護者とふれ合う場に参加し、乳幼児並びに保護者理解、子育て支援活動の内容についての理解を深める機会とする。コンセプトについては、開設当初からの「地域の子育て支援」と「学生教育」という 2 本柱が引き継がれている。

(2)「プリプリキッズ・ユニバ」運営実施体制

中野キャンパスの開設に向けては、中野キャンパス総務課や施設課の職員の方々とも打ち合わせを積み重ね、多くの人の協力により開設に至った。

中野キャンパス移転後の 1 年目（2013 年度）の運営体制は、週 1 回、2 時間の開設（開設時間 10:00～12:00）、前期 10 回、後期 10 回の年間 20 回（開設期間 5 月～7 月、10 月～12 月）とした。しかし、中野キャンパスでのプリプリキッズ・ユニバの反響は、千葉キャンパスとは比較にならない程大きく、登録親子 50 組を受け付け、その他 100 組近い親子をお断りする事態となった。それを受け、2014 年度は、週 2 回年間 40 回の運営体制としたが、口コミも広まり、120 組を受け付け、80 組程の親子をお断りするという状況だった。

2013 年度は、責任者 1 名・担当者 2 名としたが、2014 年度は開設日増加に伴い、責任者 1 名（保育・幼稚園コースのコース長）・担当者 4 名（保育・幼稚園コース教員）の体制となった。またセミナーの関わりもあり、保育・幼稚園コースの全教員の協力を得ながら取り組んでいる。

(3)「プリプリキッズ・ユニバ」学生参加について

現段階では、授業での取り組みではないため、授業を入れずに空きコマを作らないと参加が難しい現状もあり、全面的にスタッフとして関われる学生は多くはない。しかし、少しでも関わりたいとの思いから、授業の合間をぬっての部分的な参加も含めると 1 回の学生参加人数 10～15 名程おり、この 1 年半の間に延 600 人の学生がプリプリキッズ・ユニバの活動を経験した。

保育者養成の 4 年間を通じて、段階的にステップアップを図れる体制として、現段階ではセミナーを含め、下記の通りの関わりで行っている。3 年生の夏に行う初めての保育所実習に向けて経験ができるよう、2 年後期から参加できるように時間割の配慮をいただいた。2 年後期から参加することで、3 年次夏の保育所実習の課題意識の高まりや子どもとの関わりの経験

の充実へとつながっている。

1 年	プリプリキッズ・ユニバ開催の部屋の見学、セミナーにて全学生がプリプリキッズ・ユニバの装飾を担当
2 年	有志学生がスタッフとして参加、セミナーにて全学生がプリプリキッズ・ユニバの装飾を担当、見取り図作成（「乳児保育」）
3 年	前期から年間を通して、有志学生がスタッフとして参加
4 年	前期に有志学生がスタッフとして参加、後輩への引き継ぎ 必要に応じて協力

主に、前期学生スタッフは 3・4 年生、後期学生スタッフは 2・3 年生とした。

4)「プリプリキッズ・ユニバ」外部や地域とのつながりの一例

本学受験を検討している高校生から「保育の 1 年生からプリプリキッズ・ユニバに参加できるかどうか」等の電話における問い合わせがあった他、外部からの見学希望も随時受けている。2013 年度、地域からは中野区子ども家庭支援センターや中野区社会福祉協議会・東京都社会福祉協議会、中野区医師会子育て応援団事務局、2014 年度には中野区子ども教育部（子育て支援分野）、中野区の民間子育て支援団体の関係者が見学に訪れている。またプリプリキッズ・ユニバの中で、地域の子育て支援活動について紹介するなど、少しずつ地域ともつながり始めた。

5)「プリプリキッズ・ユニバ」の保育環境

本学 1 階の親子広場「プリプリキッズ・ユニバ」は、「プレイルーム 1」「プレイルーム 2」の 2 室からなり約 240㎡ある。「プレイルーム 1」は床暖房が設置されており、広く明るい子ども用のトイレも付いている。清潔で美しく、大学構内に設置された親子のプレイルームとしては充実した設備と環境にある。学内の食堂に面して全面ガラスとなっているため、通りかかる学生や教職員の目が子どもたちへ温かい眼差しを投げかけている。保育者養成校の学内に親子のふれあう場があるということの意味は大きいといえる。

開設にあたっては「地域の子育て支援」と「学生教育」の 2 本柱のもと、次のことを基本としている。①「プリプリキッズ・ユニバ」は子どもが主体的に遊ぶことを大切にして運営することで、保護者も育児のあり方

やかかわり方を知ることができる②学生がスタッフとして参加し、主体的に運営に関わることで、子どもの発達や遊び、親子のかかわり方への理解を深め、子育て支援のあり方を学ぶ③教員は、学生が実践を通して保育者として必要な経験を得ることを支援する。

「プリプリキッズ・ユニバ」に通う子どもたちは、0歳から3歳ぐらいまでの保育園の乳児クラスに相当する子どもたちである。この年齢はめざましい発達をとげ、自我が芽ばえ、自我が充実していく時期である。子どもたちは保護者以外の大人や友達への関心を広げ、自分が興味関心をもったおもちゃに触れたり、なめたり、いじったりしながら、さまざまな素材にしっかりと関わっていくことが大切な年齢である。そのため、「子どもが主体的に探索活動を行える環境」「遊びに集中できるような環境」「この時期の興味関心を踏まえたおもちゃの数や種類の充実」などを考えて環境を整備した。

このような考え方から「プリプリキッズ・ユニバ」を子どもが主体的に遊ぶことができる保育室と位置づけて、子ども自らが室内のおもちゃから好きなものを見つけ、おとなの眼差しに見守られながら、主体的に育っていくことを重視した。そのためには、ひとり遊びに集中できるようにガラス面におもちゃ棚を設置して、遊んでいる子どもの視線からは外が見えないような工夫が施してある。

「プレイルーム1」は静的な遊びをする場として、木製や手作りのおもちゃなどを豊富に用意し、発達や年齢、安全を考慮したコーナー遊びの場を作り、好きな物をすぐに取り出せるようにして、子どもたちが、集中して遊べる場にしている。

「プレイルーム2」は動的な遊びをする場として、ボールプールやすべり台、昇ったりぶら下がったりできる「ろくぼく」や、ピアノや打楽器、木琴、鈴などさまざまな本物の楽器を、子どもが好きなように使って音の体験ができる。

また、2013年4月の開設時から子どもたちの成長に合わせて室内環境を見直したり、コースの教員手作りの木製おもちゃ（お人形のベッドやドングリころころ等）、プレイルームにあわせた木製の棚や本箱などの手作りのものが用意されるなど、より子どもの成長や発達に適した環境の充実がなされ、静かでゆったりとした環境に整えられている。

こうした環境づくりをすすめるとともに、保護者からの要望に応じて水遊びや小麦粉粘土などの遊びの提

供も行ってきた。「プリプリキッズ・ユニバ」の体験から、子どもも保護者も学生も保育における環境の大切さを学ぶことができる。週に1回の親子広場ではあるが、子育て支援の実践のなかで、子どものあそびの内容の深化や、大人とのふれあい、こども同士の関わりのなかで成長する姿が見られることは関係者にとって大きな喜びである。

(6) 子どもの育ちの姿

はじめて「プリプリキッズ・ユニバ」に来た子どもたちは、最初は少し緊張気味だが、すぐに室内のおもちゃや遊具に目が釘付けとなり、保護者と一緒にあちこちを探索しながら気に入ったものを見つけ出している。時間が経過してプレイルームの雰囲気慣れてくると、保護者から離れてじっくりと遊ぶ姿や、学生スタッフに遊んでもらう子が多くなる。

保護者からは、「お兄さん、お姉さんと遊ぶのを楽しみにしている」「こんなに集中して遊ぶのはじめてみた」「『プリプリに行くよ』」というと喜んでいて」という子どもたちとの会話の様子や感想が寄せられている。また、住宅事情から家庭では体験させにくい水あそびやろくぼくにぶら下がりスリルを楽しむ遊び、積み上げた積み木やカプラを壊すことから始まる構成遊びなど、全身を使うスケールの大きい遊びの体験を通して、子どもの遊びの世界が広がっていくだろうと思われる。

子どもたちの成長過程をみると、1年目は低月齢児が多いことから、ごっこ遊びや子ども同士でのおもちゃの取り合いなどはほとんど見られなかったが、2年目は月齢の高い子どもたちが多く、最初から場所のとりあい、おもちゃの奪い合いなどの場面が多く見られる。1年目より2年目へとスタッフ、保護者も場に慣れてきており、ゆったりとした雰囲気ができつつある。そのことが、子どもたちがすぐに場所に慣れて、自分を出せるようになってきている要因ではないかと思われる。自分を出せる子どもの姿をトラブルとしてではなく、自我の表れとして成長を確認することなど、子どもと大人の関わり方を学生が学ぶだけではなく保護者も一緒に成長する場となっている。

(7) 保護者と学生スタッフの関わりと育ち合い

保護者も学生もはじめは緊張する姿があったが、子どもとの遊び体験を経て、少しずつ会話が増えてきた。学生が子どもの成長する姿を間近で見て感動した

り、保護者から家庭での様子を伺ってその成長ぶりを一緒に喜ぶなど、子育ての喜びを共有することが徐々にできるようになってきている。それは、以下の学生の感想からも知ることができる。

「1週間見ないだけで、ひとりで立てない子が立てるようになった」「立つだけだったのに今日はその子が歩いていた」「先週すべり台で泣いていた子が、今週は泣かずに自分からすべっていた。お母さんも喜んで」「すべり台の階段を今日初めて昇れた子がいた。成長を感じた」「赤ちゃんを抱っこさせてもらった。はじめはぎこちなかったけど、お互いに慣れてきてうまくできた」「月齢の低い子もお母さんから離れて積極的にももちゃで遊んだりしていた。時間が経つとやはり不安になって、お母さんの所へ行くことも多かったけど、近くにいれば、安心して遊ぶ様子が見られた」「後期、2か月ぶりに子どもたちに会ったら、背が伸びていて、今までできなかったこともできるようになっていた。口数の少なかった子がすごくおしゃべりするようになっていた。」「『チョウダイ』『アゲル』などのやりとりができるようになっていて楽しかった」

学生はこうしたコミュニケーションを通じて、赤ちゃんに対する保護者の愛情を深く理解しようとする積極的な姿勢になってくる。ある学生は、赤ちゃんのお母さんから「興味のあるおもちゃに自分から手を伸ばしてつかむのはいつ頃からですか」と質問されてうまく答えられず、月齢毎の発達を学び直す必要を感じたり、子ども同士の衝突する場面で、保護者が上手に仲裁に入っている様子を見て感心したりなど、学びへとつながる経験や保護者への尊敬の念などさまざまなことを教員に話している。この広場の中だけでも、よく話す子、絵を描くのが好きな子、新幹線にこだわる子など、さまざまな姿を見る機会も増えて、この場が「とてもいい雰囲気だと思う」と感じている。

また、実践を通しての事例では、「おわりの会」（学生による手遊びや、親子で楽しむ体あそび、絵本などを楽しむ場。10分程度）で、保護者が学生を応援して、盛り上げてくれるのがわかって、親子で一緒に遊べることをもっと考えていこうとしたり、はじめは幼児向けのテンポの速い遊びを用意していた学生たちが、子どもの反応を知ることで、徐々に乳児向けのゆったりしたテンポに変わっていくなど、子どもから学んでいく姿がみられた。また、最初はどのように接すればいいかわからなかった学生が、先輩の対応を見て「すごい」「私もこんなふうになりたい」と刺激をうけてい

く過程もみられた。

保護者からは、1年目は「学生に歌やダンスなどもっと何かやってもらいたい」という声も聞かれたが、一方的に提供することよりも、まずは子どもが主体となって自ら遊ぶ体験を重視したいと考えて、親子ともに楽しむといった側面を重視した「おかえりの会」を運営している。会の運営スタイルも親子・学生ともにお互いに徐々に慣れてきてからは、少しずつ学生から提供する設定あそびなども取り入れている。

(8) 本学の親子広場の特徴

本学の親子広場「プリプリキッズ・ユニバ」は、教員が直接運営に関わり、プレイルームに入って保育に参加していることが特徴である。また、学生スタッフが保育だけではなく、親子を迎える朝の準備から終了後の反省会まで主体的に関わることで保育を学べる利点がある。具体的には

- 9:00 教員が開錠
- 9:15 学生スタッフ集合・本日の打ち合わせ
「おわりの会」リハーサル
- 9:30 遊ぶための環境整備
- 10:00～11:45 「プリプリキッズ・ユニバ」開設
- 11:45～11:55 「おわりの会」
- 11:55～12:00 見送り
- 12:00～13:00 おもちゃ類の消毒・環境整備・反省会

以上のことを実施している。

「プリプリキッズ・ユニバ」では教員と学生スタッフが同時に共通の場面に向き合っているのも、具体的な事例を共有して教員からアドバイスを受けたり、学生同士で話し合うことができる。このように、教員が学生と共に実践の場に携わることで、理論と実践の橋渡しを担っている。

4. 今後の課題と展望

「プリプリキッズ・ユニバ」の実践を中心にして、「子育て支援」活動や保育者養成について述べてきた。最後に、本学における子育て支援活動についてその成果を踏まえて、今後の課題についてまとめる。

1) 子ども・保護者に関して

プリプリキッズ・ユニバの登録者数 120 組（火曜

コース、木曜コース各60組)に対して、参加者は天候により20組～40組と幅がある。参加した保護者・乳幼児たちの様子からは、この場を自由にのびのびと探索し、体を動かし、遊ぶ姿がみられている。はじめは緊張感もあったが、回数を増すごとに落ち着きが見られるようになってきており、時には、子供同士のトラブルも発生し、それはそれなりに、子ども同士の出会いの場となっているといえよう。また、保護者もそれぞれに遊ぶ子どもたちを見守りながらおしゃべりするようになり、親同士のつながりも生まれ始めている。全体に落ち着いた、和やかな温かい雰囲気が進められている。

今後のさらなる充実のために、次のことを検討することが重要であろう。

- 環境の構成については、保育現場や千葉キャンパスでの実践を考慮して行われているが、子どもの遊ぶ姿や参加保護者の声なども参考にして、遊具の種類、数等を検証し、補充・整理し、さらに充実させる。
- 参加保護者・乳幼児にとって「プリプリキッズ・ユニバ」の場がどのような意味を持っているか、特に「親育ちの場」としての役割について検証する。
- 従来、「遊び場の提供」を主として運営されてきたが、子どもを中心にしながら保護者同士のつながりを深めていく活動(子育てトークなど)やおもちゃ病院など、多様な活動を進めていくことも求められる。

2) 学生の学びの場として

保育・幼稚園コース2～3年の希望者で毎回12～15人が参加している。学生ははじめのうち緊張や戸惑いも見られ、なかなか子どもたちに自然にかかわることができない様子も見られたが、回を重ねるごとに子どもたちとも親しくなり、笑顔で接することができるようになってきている。何よりも、乳幼児という幼い子どもと触れ合う経験は、保育者を目指す学生にとっては貴重な学びの場となっており、保育が「子どもに添うことから始まる」ことを「身をもって」体験しているといえる。

今後、この経験を保育現場で生かしていくためには、次のような課題が考えられる。

- 「プリプリキッズ・ユニバ」での学びの内容を検証し、カリキュラムに位置づけ、実習指導の充実

を図っていく。

- 保育者養成のための各科目や授業とを関連付け、保護者理解や保護者との対応の仕方等、保育に関する様々な問題を把握し、解決していこうとする意欲を喚起する。
- 実際に乳幼児と触れ合う経験を通して、保育者になることへの意欲や期待を喚起していく。

3) 地域貢献

中野キャンパスでは、まだ2年目を迎えたところであり、関係各部署からの見学者がみられ、要望や期待が寄せられているところである。本学の「プリプリキッズ・ユニバ」の趣旨を生かしながら、今後、さらに地域の中での「子育て支援」を担い、地域の子育てに貢献していくためには、次のことが考えられよう。

- 「見学」に来てもらうだけではなく、学生自身が地域の様々な場に出向き、地域の人との交流を通して、広く子どもの育つ環境について学んでいく。
- 地域の様々な「子育て支援」活動の場との交流を行い、本学の子育て支援活動を地域の視点からとらえ、地域の中で果たしていく役割について考察していく。
- 今年度、学生が主体的に「プリプリ通信」を月1回発行し、参加教員や学生の情報、子どもの姿に対する捉え方、遊びの情報等を掲載してきた。こうした活動の効果を検証し、さらに地域にどのように開いていくかも検討事項となろう。

おわりに

本学における子育て支援活動としての「プリプリキッズ・ユニバ」の活動の意義付け並びに成果・課題について、子育て支援活動の今後の方向も含めて述べてきた。今年度、ボランティアとして参加してきた学生の変容を踏まえて、平成27年度から、実習指導並びに乳児保育の授業として位置づけ、学生が全員「プリプリキッズ・ユニバ」を体験し、その体験を生かして保育実習に参加し、現場で活躍できるよう準備を進めているところである。しかし、この「プリプリキッズ・ユニバ」は保護者も参加している場であり保育現場とは異なる。いうまでもなく、「プリプリキッズ・ユニバ」は子育て支援の場であり、そこで乳幼児と触れ合う経験は大変貴重ではあるが、保育現場をあらかじめ経験することとは異なる。このことは、これからの保

保育者養成に求められる、「子育て支援」についての基本的な知識・技能を身に付けていくこととどのように関連していくかを考えていくことが求められよう。従来、「家庭支援論」「こどもの理解」「乳児保育」等の科目で触れられていた「子育て支援」は、それぞれの科目の内容から捉えた「子育て支援」であり、本来「子育て支援」に関して学生が身に付けることが求められる内容とは異なると考えられる。その意味では、本学で進められている「子育て支援活動」を生かし、本学の「実学」の精神を更に具現化していくためには、この「子育て支援」という新たな課題を受け止め、学生に指導していく体制についても考えていくことが求められよう。

引用文献

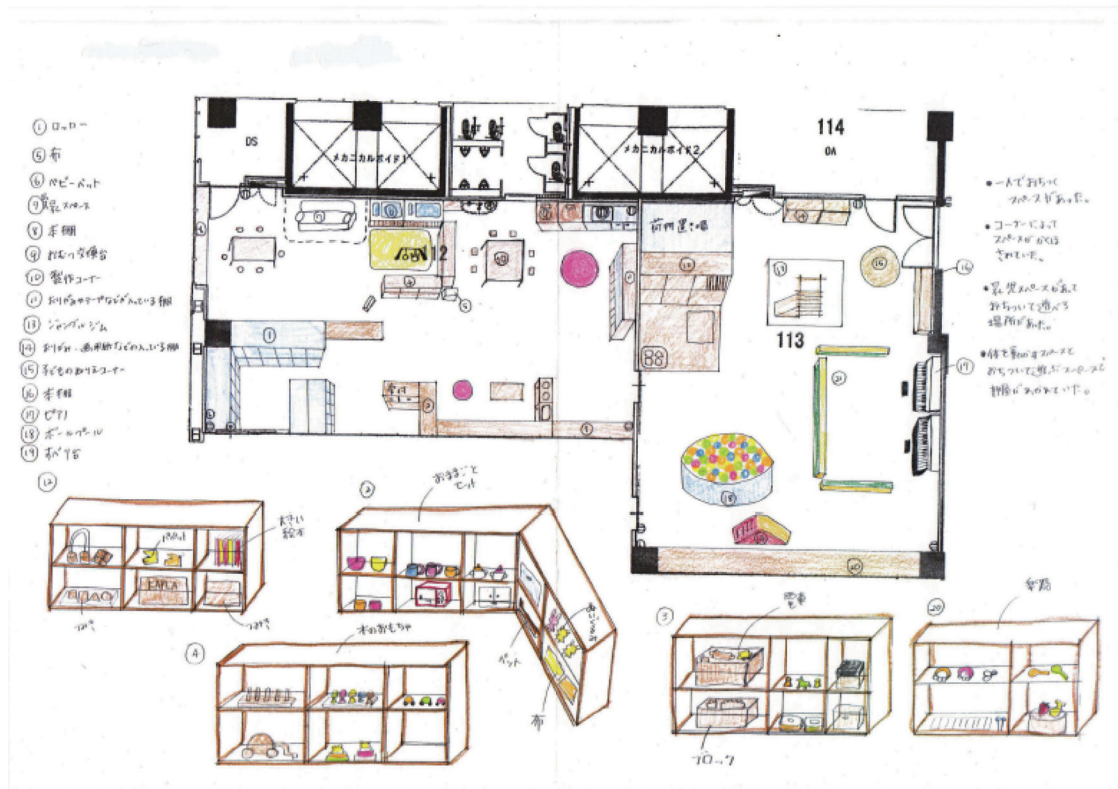
- 1) 荒牧美佐子・田村毅 (2003) 育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因：幼稚園児を持つ母親の場合．東京学芸大学紀要．第6部門，技術・家政・環境教育，55,83-93.
- 2) 岩田美香 (1997) 「育児不安」研究の限界：現代の育児構造と母親の位置．教育福祉研究，3: 27-34.
- 3) 大豆生田啓友 (2006) 支え合い、育ち合いの子育て支援．関東学院大学出版会．
- 4) 柏女霊峰他 (2000) 保育所実施型地域子育て支援センターの運営及び相談活動分析．子ども家庭総合研究紀要，36,29-57.
- 5) 柏女霊峰他 (2010) 児童福祉施設における保育士の保育相談支援（保育指導）技術の体系化に関する研究（1）－保育所保育士の技術の把握と施設保育士の保護者支援－．日本子ども家庭総合研究紀要，46,11-84.
- 6) 梶浦真由美他 (2006)：「保育者養成校における子育て支援に関する研究（1）」，北海道文教大学研究紀要，第30号，48.
- 7) 片山啓子 (2009)：「地域協働による『にいみ子育てカレッジ』の概要と設立過程」，新見公立短期大学紀要，第29巻第2号.
- 8) 厚生労働省 (2003) 指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について．http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/hoiku/dl/tokurei3-2.pdf. 2014.10.25.
- 9) 厚生労働省 (2014) <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/23jokyo-hiroba.pdf>「子ども・子育て支援」
- 10) 齊藤美代子・橘田美千代・園川緑 (2014) 「保育者養成校における子育て支援親子広場の在り方ー参加親子の保護者アンケートと学生レポートからー」帝京平成大学 児童学科研究論集 第4号．
- 11) 櫛原洋一・今井和子 (2006) 今求められる質の高い乳児保育の実践と子育て支援．ミネルヴァ書房．
- 12) 全国保育士養成協議会 (2013) 「保育者の専門性についての調査」ー養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組みー．全国保育士養成協議会専門委員会課題研究報告書．
- 14) 傳馬淳一郎他 (2013) 「名寄市における福祉保険医療連携と子育て支援に関する事業の展開」，名寄市立大学紀要，第7巻.
- 15) 豊田和子 (2010) 保育者養成校における「保護者支援・子育て支援」力の育成課題について．保育子育て研究所年報．第8号．44-56.
- 16) 内閣府 (2014) 子ども・子育て支援新制度について．<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/pdf/setsume.pdf> 2014.10.25.
- 17) 永久久子 (1995) 専業主婦における子どもの位置と生活感情．母子研究，16, 50-57.
- 18) ヒューマンライフ支援センター (2014) http://www.tokyo-kasei.ac.jp/hulip/hulip/gaiyou/gaiyou_kosodate_index.html
- 19) 村山祐一他 (2005) 文部省科学研究費助成事業「保育・子育てに関する意識調査」報告書．
- 20) 吉田真理他 (2008)：「地域に根ざす短期大学としての活動の枠組みに関する考察」，小田原短期大学紀要，第38号.
- 21) 渡辺弥生・石井睦子 (2005) 母親の育児不安に影響を及ぼす要因について．法政大学文学部紀要 51, 35-46.

謝辞

ブリブリキッズ・ユニバの運営にあたり、児玉課長を始めとする総務課の皆様、池袋情報センターの皆様、メディア文化コース・児童学科の諸先生方、制作・デザインでご尽力いただいた恵晋一先生に心より感謝致します。最後に、本論文作成にあたり、お忙しい中、

英訳でお時間を割いて下さった赤松直子先生、Jason

Goodier 先生に深く感謝致します。



資料3：プリプリキッズ・ユニバ保育室 見取り図（「乳児保育」授業時にて学生が作成）